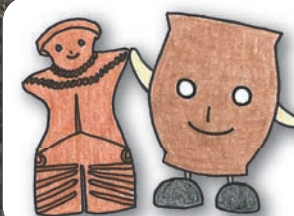




蔵王町と縄文遺跡の位置

蔵王町の歴史と文化財 公式ホームページ
dokitan.com
 どきたんドットコム

編集・発行 蔵王町教育委員会 2016年3月31日発行
〒989-0892 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10
TEL 0224-33-2328 FAX 0224-33-3831 info@dokitan.com



蔵王連峰の東麓に広がる蔵王町の丘陵地帯では、たくさんの縄文時代の遺跡が発見されています。私たちの暮らす地面の下には、あちらこちらに今から数千年前に生きた縄文人たちの暮らしの跡が埋もれているのです。町内の縄文遺跡の発掘調査から見てきた、蔵王山麓の豊かな森に生きる縄文人たちの暮らしぶりをご紹介します。

文化財マスコットキャラクター・どきたん

蔵王町教育委員会

縄文時代のはじまり

蔵王町内に残された最古の人びとの活動の痕跡は、約2万年前の後期旧石器時代の遺跡です。当時の日本列島の気候は寒冷で、人びとは石槍を手に獲物を求めて遊動生活を送っていました。

その後、気候は徐々に温暖化に向かいます。今から約1万3000年前には急激な気候変動があり、人びとの暮らし環境が大きく変化しました。そうした新しい環境の中で、住む場所を決めてムラをつくり、家を建て、狩猟・採集・漁労活動しながら土器を使って暮らす人びとが現れました。縄文時代の始まりです。

縄文人の家は、地面を平らに掘りくぼめた床の上に柱を立て、屋根をかけた竪穴住居です。ムラでは集団で共同生活を営み、弓矢を使った狩りや、貝や魚の漁、山菜や木の実の採集によって食料を手に入れていました。また、粘土で形をつくり、縄で文様をつけて焼き上げた縄文土器を使って食料の煮炊きをしたり、食料の少ない冬に備えて保存したりしていました。

縄文時代の人びとの暮らしは、約2300年前に日本列島で米づくりを営む人びとが現れるまで、約1万年もの間、大きく変わることなく続きました。

縄文人の暮らしと土器の移り変わり

蔵王山麓の森と縄文人の暮らし

気候の温暖化が進むと、蔵王山麓にも落葉広葉樹の森が広がるようになりました。季節の山菜にドングリやクリ、トチやブナの実、オイチゴやアケビが実る豊かな森です。



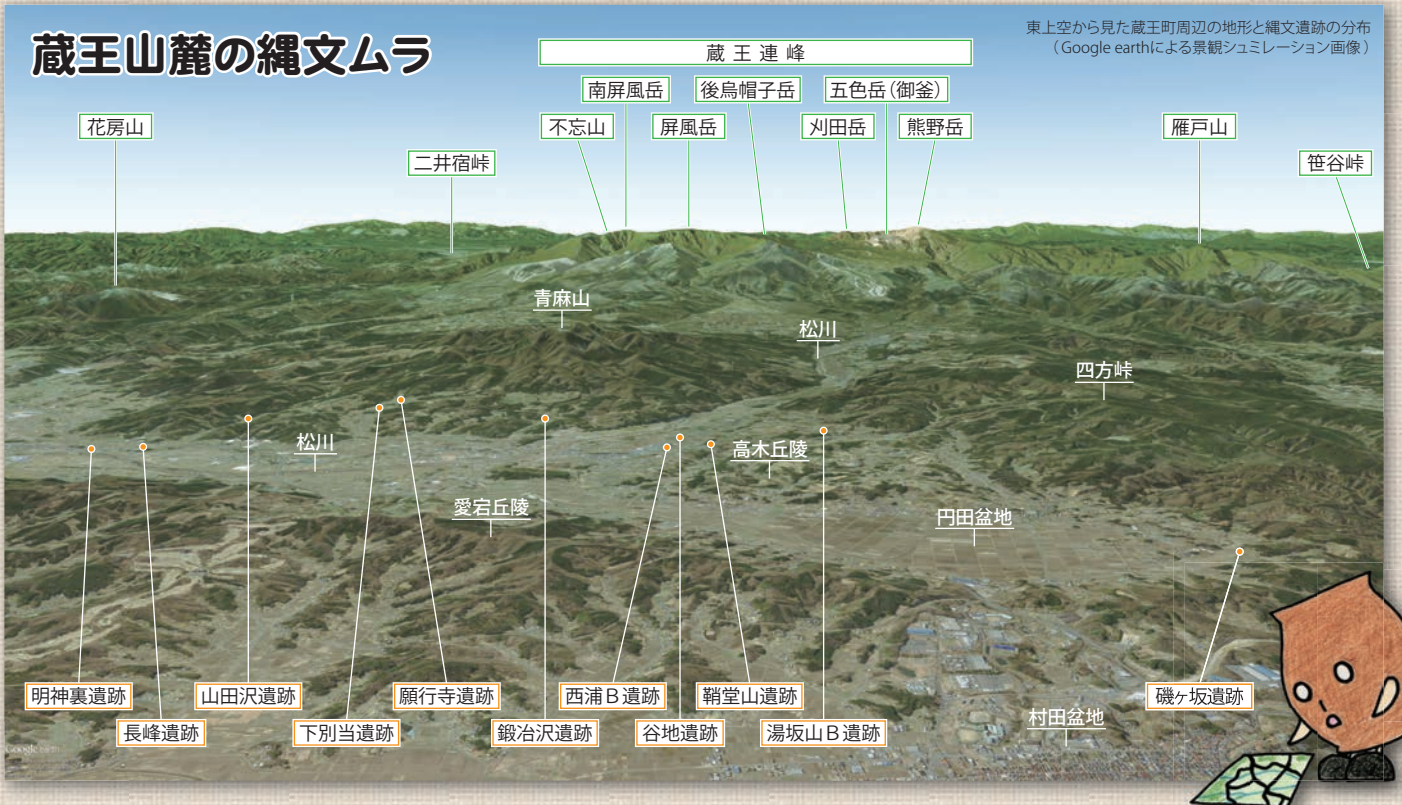
豊かな森は、シカやイノシシ、ノウサギなどたくさんの動物たちも育みました。安定した食料や、それを加工し保存する技術が縄文人の定住生活を支えたのです。

蔵王山麓の縄文人は、水辺に近く日当たりの良い高台にムラを営みました。彼らはムラのまわりで手に入る石や草木、動物の骨や皮などを巧みに使い、生活に必要なさまざまな道具を作りました。家や衣服、カゴや土器、弓矢や石斧も、現代の暮らしとは違ってすべて自分たちで自然の材料から作り出したのです。

このように蔵王山麓の縄文人は森の自然をよく知り、ときには厳しい環境の中で、季節ごとの恵みを上手に組み合わせながら豊かな生活を送っていました。



恵みをもたらすブナの森



奥羽山脈の蔵王連峰から東に広がる蔵王町は、西端の屏風岳から南東部の松川と白石川の合流点まで1800m以上の標高差があり、変化に富んだ地形が特徴です。縄文時代にも、現在と同じように五色岳周辺での噴火活動が繰り返されていました。

縄文時代の遺跡は、蔵王連峰から延びる丘陵に多く発見されています。中期の遺跡は松川に面した見晴らしの良い河岸段丘や高木丘陵に、晩期の遺跡は青麻山の裾野に多く残されているので、時期によってムラが営まれる場所が変化したことが分かります。



* 東北歴史博物館蔵 ** 東北大学蔵 *** 白石市教育委員会蔵 △写真提供:東北歴史博物館

発掘された 縄文ムラの跡 ―蔵王町の縄文遺跡―



町内には約 200 か所の遺跡があり、このうち 128 か所で縄文時代の土器などが見つかっています。こうした遺跡を発掘調査して住居の跡などを詳しく調べていくと、縄文人の暮らしぶりを知ることができます。これまでに発掘された縄文ムラの遺跡と出土品を見てみましょう。

谷地遺跡 白石消防署蔵王出張所の移転に伴って平成 23・24 年度に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代中期前半の住居跡 14 軒、貯蔵穴 55 基、捨て場遺構などを発見し、整理箱 650 箱に及ぶ膨大な量の遺物が出土しました。

住居跡には地面を円形に掘り窪めて柱を立てた竪穴住居と、掘り込みがなく亀甲形に柱を配置した平地住居とがあり、建てられた時期により異なるようです。

貯蔵穴は上部が狭く底が広い三角フラスコのような形の穴で、人の背丈ほどの深さを持つ大型のものもあります。穴の底に溜まる水を流すためと思われる溝や小穴が掘られたものもありました。

捨て場遺構はモノを捨てた場所と考えられますが、土器や石器だけでなく信仰用と考えられる土偶なども出土しているので、役目を終えたモノを自然に返す儀礼行為などのまつりを行っていたのかもしれません。

出土した遺物は縄文土器、石器、土偶、土製品、石製品などです。縄文土器は当時の東北地方南部に流行した

大木 7a・7b・8a 式と呼ばれるデザインが主体ですが、関東・北陸地方などに由来するものも見られます。

また、石器に使われた石材の大部分は山形県産の珪質頁岩ですが、このほかに栃木・新潟・山形・岩手県産の黒曜石、北海道日高地方産の緑色片岩などが見られ、当時の地域間交流を知ることができます。



縄文土器 盛り付け用の浅鉢や、煮炊き用の鍋や貯蔵用の甕のように使った深鉢があります。小型の土器には精巧な文様や赤く色が塗られたものがあります。特に小型のものは、大きな土器を模して作られたミニチュアの土器です。



石器 狩りに使う石槍や弓矢の矢尻、木の伐採や加工に使う石斧、皮なめしなどに使う石篋、つまみ付きの万能ナイフ、穴を開けるドリルなどがあります。



土偶 自立する立像タイプのものが多く、非常に大型のものと、中型、小型のものがあります。ほとんどが頭部や胴体、脚などに分かれた破片の状態出土しました。



土製品と石製品 硬玉（ヒスイ）製のペンダントや土製の耳飾りなど、様々な形のものがあります。多くは使い方が不明で、アクセサリやお守りのようなものと思われます。



竪穴住居跡の調査 直径約7m、深さ43cmの住居跡です。慎重に掘り下げていくと土器などが出土し、硬く踏みしめられた床面と赤く焼けた炉跡があらわれました。



貯蔵穴の調査 直径250cm、深さ126cmの貯蔵穴です。中央近くの底面に斜めに掘られた小穴があり、梯子などを固定したのかもしれませんが。底面近くで土器が出土しました。



土器の出土状況 良く似たデザインの二つの土器が、形を保った状態で出土しました。左側の土器は底がなく、穴の中に立てた状態で埋められていました。

鞘堂山遺跡 町役場北西側の高台にあり、町道高木曲木線の拡幅工事に伴って平成 10 年度に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代中期中葉を中心とする時期の竪穴住居跡 5 軒、炉跡 6 か所、貯蔵穴 31 基、土坑墓 5 基などが発見されました。

遺構の分布を見ると、多数の貯蔵穴が分布する範囲を挟んで住居跡や炉跡が発見されています。周囲の地形や遺物の散布状況などから、貯蔵穴群の外側に住居群がドーナツ状に配置されていたようです。

貯蔵穴などからは縄文土器、石器、土偶、土製品、石製品などが出土しました。貯蔵穴からは、ある程度形を保った状態の縄文土器が多く出土していますが、完全な形に復元されるものは少なく、別の場所で使われていたものが廃棄されたのでしょう。

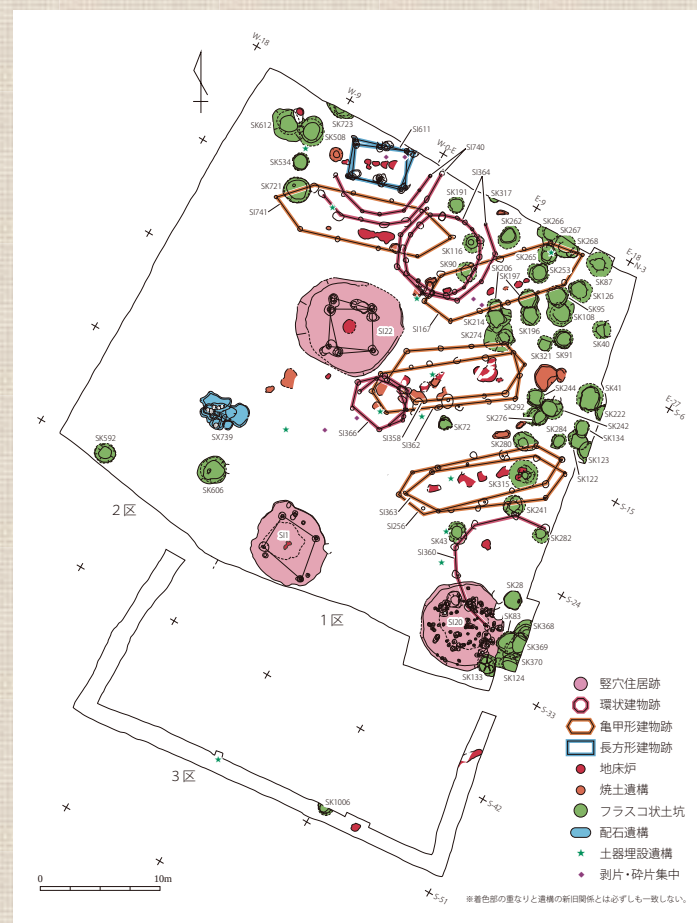
縄文土器は当時の東北地方中南部に流行した大木 8a・8b 式と呼ばれるデザインで、大型で派手な装飾を施した土器が多く見られます。



発掘調査の様子 トウモロコシ畑の下を数十センチ掘り下げると、縄文時代の住居跡や貯蔵穴が現れました。



縄文土器 ダイナミックな渦巻文や立体的な装飾が特徴的です。この時期の大木式土器は分布域も広く、北東北や関東地方の土器のデザインにも影響を与えました。新潟県など北陸地方では、やはり立体的な装飾が特徴の火焰型土器が流行しました。



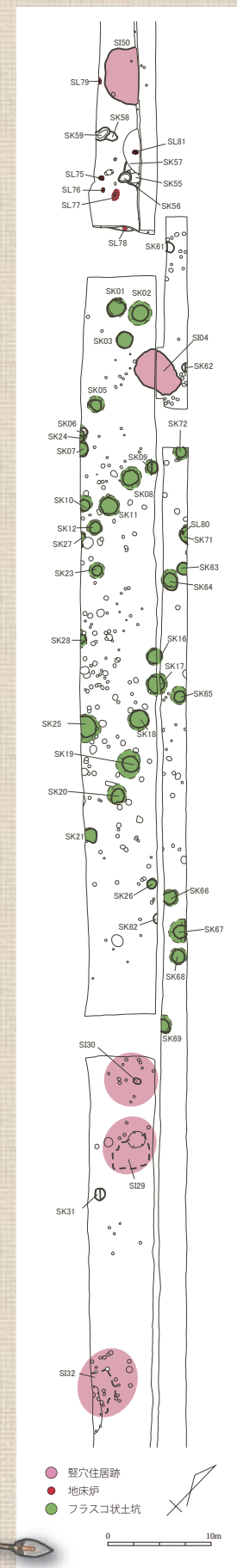
主な遺構の配置 竪穴住居跡（○）、平地住居跡（○、○、○）、貯蔵穴（●）、配石遺構（●）などがあり、空白地や使われなくなった住居跡の窪みなどが捨て場として利用されました。各遺構が重なり合っていることから、この集落の暮らしが長期間続いたことが分かります。



竪穴住居跡 外周に沿って直径10cmほどの比較的細い柱を立て、屋根を支える構造だったようです。中央に炉跡があり、床が赤く焼けています。



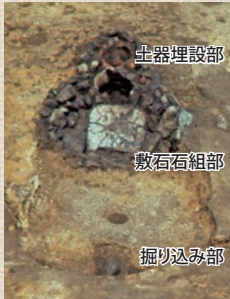
石槍が副葬された墓 楕円形に掘られた穴の底で、そろえて置かれた2点の石槍が出土しました。埋葬されたのは狩りの名手だったのでしょうか。



主な遺構の配置 竪穴住居跡（○）、炉跡（●）、貯蔵穴（●）があり、貯蔵穴群を挟んで住居跡や炉跡が見つかっています。

湯坂山B遺跡 町道堀の内棚倉線の改良工事に伴って平成3年度に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代中期後葉を中心とする時期の竪穴住居跡23軒、貯蔵穴13基などが発見されました。

竪穴住居は、内部に「複式炉」と呼ばれる特殊な形の炉を設置しています。住居の出入口を兼ねる「掘り込み部」に河原石で構築した「敷石石組部（石組炉）」、深鉢形土器を埋め込んだ「土器埋設部」が連結するもので、当時の東北部地域に特有の施設です。



複式炉

住居跡や貯蔵穴などからは縄文土器や石器のほか、土偶や土笛、祭祀用土器などの特殊な遺物も出土しています。縄文土器は当時の東北地方南部に流行した大木9・10式と呼ばれるデザインが主体で、立体的な線で描かれる渦巻文や縦長の楕円文などが特徴です。

石器に使われた石材は山形県産の珪質頁岩が主体ですが、磨製石斧には北陸地方産の蛇紋岩や硬玉（ヒスイ）、北海道日高地方産の緑色片岩など遠隔地の石材も利用されています。



磨製石斧 柄に取り付けて木の伐採や加工に使いました。遠隔地産の蛇紋岩やヒスイ、緑色片岩で作られており、希少品だったと思われるが、破損したものが多く実用品として使われていたようです。



土偶の頭部または縄文土器の装飾

目と口が丸い孔で表現され、鼻の造形は写実的です。後ろ側は渦巻文で装飾されており、胴体の部分が見つかっていないので、もしかしたら土偶ではなく、縄文土器の上部に装飾として付けられたものかもしれません。



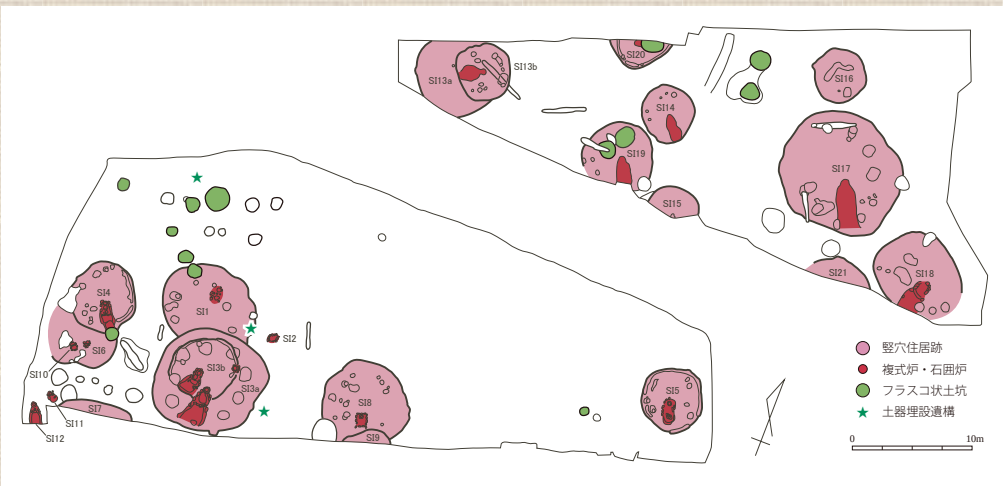
竪穴住居跡 直径約9mで、8か所の柱穴を持つ大型の住居です。写真手前が入口で、正面に複式炉が設けられています。火を焚いた場所は地面が赤く変色しています。左上にあるやや小さい複式炉は、後で建てられた二回りほど小さい住居のものです。



縄文土器 立体的な線で描いた渦巻文や縦に長い楕円文を用いるもの（大木9式）、土器の上部にC字状の文様を描き、下部を縄文のみとするもの（大木10式）があります。



発掘調査の様子 遺跡は青麻山を望む丘の上にあり、住居跡などの広がりには調査区外へ続いています。



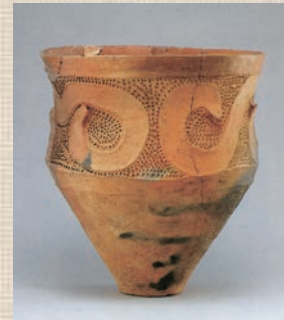
主な遺構の配置 竪穴住居（○）や貯蔵穴（●）があります。竪穴住居は直径5～6m程度のものが主体ですが、直径約9mに及ぶ大型のものも見られます。住居内には煮炊きをした炉（●）が設けられています。住居や貯蔵穴の跡が重なり合っており、場所を変えながら作り直されたことが分かります。

二屋敷遺跡 東北自動車道建設に伴って宮城県教育委員会が昭和45年に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡5軒など、後期前葉の炉跡10基、配石・立石遺構、土器埋設遺構、捨て場遺構などが発見されました。

土器埋設遺構は穴の中に深鉢形土器を埋めたもので、子どもの墓と考えられています。配石遺構は河原石を集めて楕円形に敷き並べたもので、近くには柱状の石を立てた立石遺構も見られます。配石の下に作られた



配石遺構（左）と立石遺構（右） 配石は大小の河原石を集めて楕円形に敷き並べています。配石の近くでは、柱状の石を立てて固定した立石も見つかりました。まつりや祈りの場と考えられます。



東北歴史博物館蔵

縄文土器（中期末葉）大木10式と呼ばれるデザインで、土器の上部にS字状の文様をあしらっています。



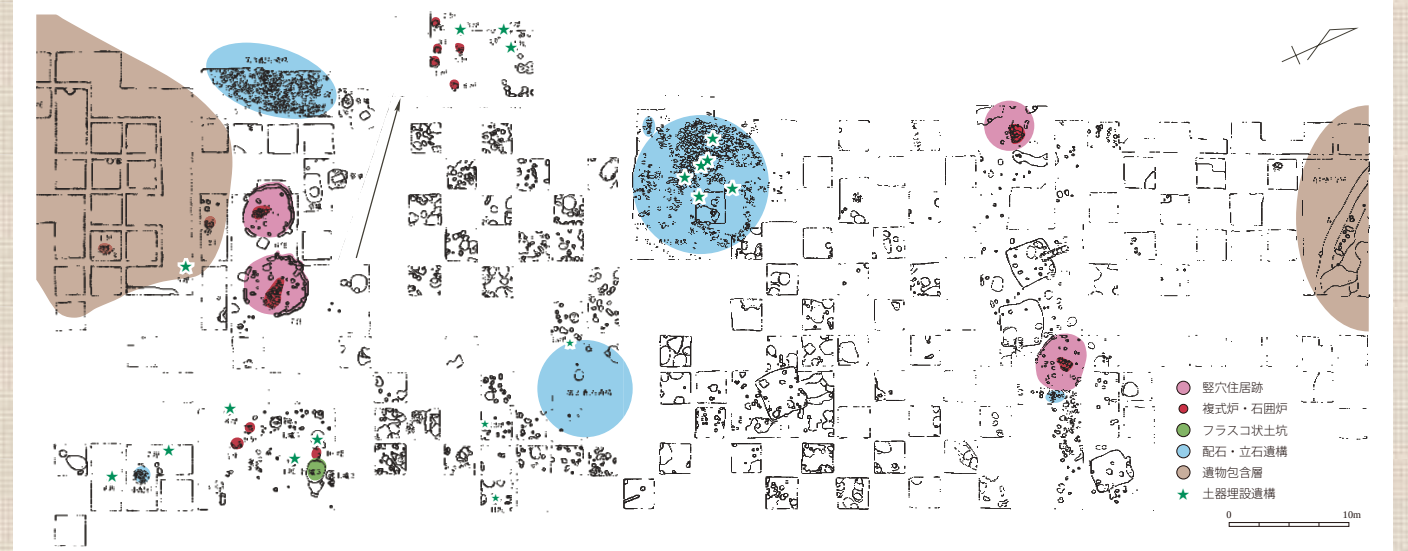
東北歴史博物館蔵

縄文土器（後期前葉） 何本かの平行する線で描かれる渦巻文や弧状文、細い粘土紐を貼り付けたY字状文などが見られます。当時の宮城県周辺に流行した南境式と呼ばれるデザインの土器ですが、宮城県内でも北部、中部、南部でそれぞれ地域性が見られます。



東北歴史博物館蔵

土偶の頭部（上）と耳飾り（下） 土偶は頭部がハート形をしたものがあります。耳飾りは現代のピアスのようにして身に着けたと考えられています。



主な遺構の配置 竪穴住居（○）は内部に複式炉を持つもので、中期末葉のもので、土器埋設遺構（★）は子どもの墓と考えられ、中期末葉から後期前葉にかけてつくられました。後期前葉になると、集落の中央部に墓や「まつり」の場と考えられる配石・立石遺構（●）が作られ、斜面部に捨て場（●）が形成されました。単独で見つかった炉（●）はこの時期のもので、住居に伴っていた可能性があります。

写真・図版提供：東北歴史博物館（中央の背景赤色の写真を除く）

西浦B遺跡 商業施設の建設工事に伴って平成21年度に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代後期前葉の竪穴住居跡 1 軒、掘立柱建物跡 23 棟、貯蔵穴 30 基などが発見されました。

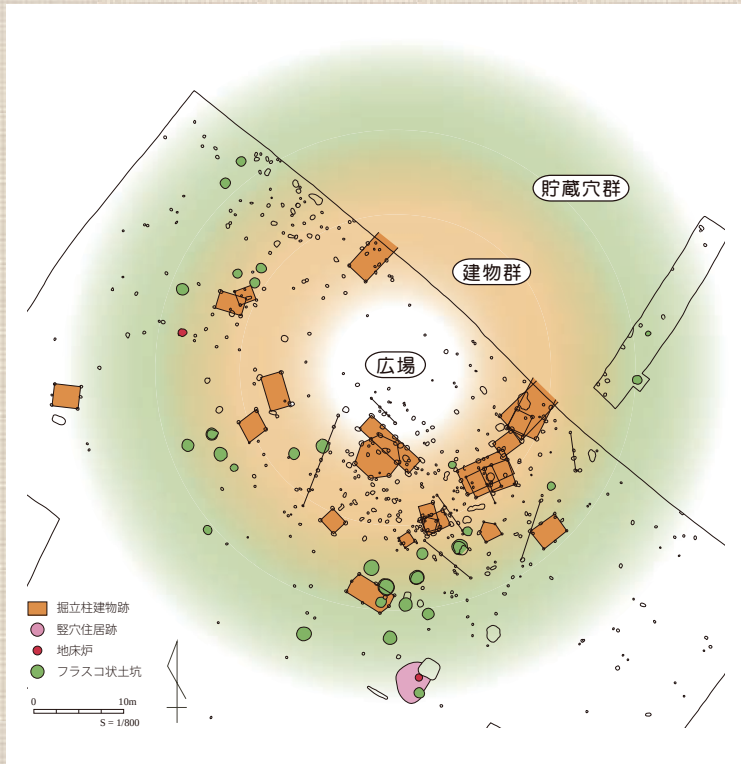
掘立柱建物跡は円を描くように並び、その外側に貯蔵穴が配置されています。中央部は遺構がなく広場のようになっています。住居や炉跡など居住に関わる施設が少なく、食料の加工などに用いた石器が出土しているので、食料の貯蔵や加工などのための季節的な活動が行なわれた場所と考えられます。

縄文時代後期になると中期のような大規模なムラが姿を消し、掘立柱建物を中心とする西浦B遺跡や、配石や立石を設ける二屋敷遺跡のように、内容の異なる中規模のムラが見られるようになります。

貯蔵穴などから出土した縄文土器は、宮城県南部の地域性を示しています。また、岩手県や北陸地方に由来するデザインの土器、新潟県や山形県産の黒曜石などが出土し、当時の地域間交流が窺われます。



縄文土器 左は宮城県周辺に流行した南境式と呼ばれるデザインで、宮城県南部の地域性が見られます。右上は岩手県、右下は北陸地方に由来するデザインの土器です。



主な遺構の配置 掘立柱建物跡（■）と貯蔵穴（●）が環状に配置され、中央部は広場になっていたようです。建物は柱を環状に配置するものや長方形など様々な形のものがありますが、あまり規模は大きくありません。



貯蔵穴（左）と石組炉跡（右） 貯蔵穴は上部が失われているものが多いと見えます。石組炉は周囲に河原石を並べた炉で、底面が赤く焼けています。

願行寺遺跡 青麻山の裾野にあり、谷に面したなだらかな斜面に立地しています。これまでに発掘調査は行なわれていませんが、縄文時代晩期の珍しい土偶が採集されています。

縄文時代の土偶のほとんどは直立した姿勢ですが、稀に直立以外の姿勢をとるものが見られます。この土偶は腰と膝を折り曲げて腰掛ける姿勢をとっています。手を膝の上に寄せ、手首には腕輪をはめており、腰の部分にはパンツのような衣服を身に着けています。顔面は目鼻と口が写実的に表現され、上半身は裸で乳房のような表現がありますが、一般に女性像とされる土偶のように腹部やお尻の膨らみはなく、性別は不明です。

縄文時代の土偶がどんな目的で作られたのか、詳しいことは分かっていませんが、このようにポーズをとる

土偶は縄文時代後期以降に見られるようになるので、縄文人にとって土偶の持つ意味や役割が変化してきたらしいことが分かります。



腰掛ける姿勢の土偶 縄文時代晩期の土器に用いられた雲形文が頭の後ろに付けられているので、この時期に作られたことが分かります。一部に赤い顔料が残っているのも、もとは赤く塗られていたようです。

鍛冶沢遺跡 明治37年に「東京人類学雑誌」で紹介されるなど古くから著名な遺跡で、農作業中に出土したほぼ完全な形の土偶がよく知られています。

広域農道建設に伴って宮城県教育委員会が遺跡の東部で平成19・20年度に発掘調査を行ないました。調査の結果、縄文時代後期後葉から弥生時代前期にかけての竪穴住居跡 5 軒、掘立柱建物跡群 3 か所、掘立柱建物跡 15 棟、土器埋設遺構 14 基、土坑墓 10 基、集石遺構 1 基などが発見されました。

縄文時代晩期中葉の掘立柱建物跡群 3 か所は広場を囲むように扇状に配置され、同じ場所で何度も建て替えられていました。このような建物は集落の中でも重要な施設で、食料や生活、まつりに関わるモノなどを保管した共同の倉庫だったのではないかと考えられています。

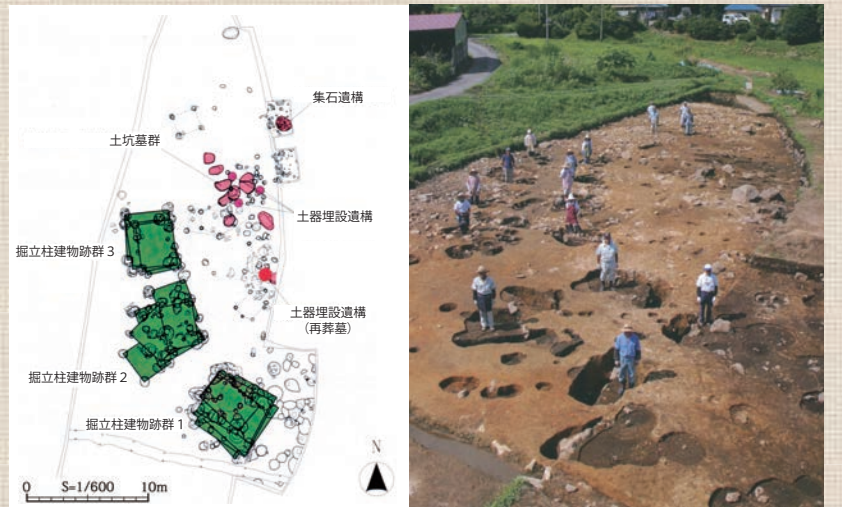
広場だった場所には、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけて墓が作られました。穴を掘り遺体を埋葬した土坑墓と、後に遺骨を掘り出して壺などに納めて再度埋葬したと考えられる土器埋設遺構とがあり、当時の葬送や祖先崇拜の風習を知ることができます。

今回調査された場所は、後に墓域となる広場を中心とした葬送や信仰に関わる特別な場所であったと考えられます。遺跡の面積は広く、西側には住居などが作られた生活の場が広がっていると予想されます。

写真・図版提供：東北歴史博物館（左端の土偶の写真を除く）



遺跡全景（東から） 青麻山の裾野にあり、谷に面したなだらかな斜面に立地しています。遺跡は畑地となっている一帯に広がり、手前で見えているのが発掘調査した場所です。



扇状に並ぶ掘立柱建物跡群 広場を囲むように扇状に配置され、何度も建て替えられた4本柱の建物跡（●）が3か所で見つかりました。建物群より少し後の時期になると、広場には墓（●・●・●）が作られるようになります。



土偶と石製品 土偶は昭和初期、耕作中に発見されたものです。ほぼ完全な形をとどめ、中空で立てて置くことのできる作りです。右上は硬玉（ヒスイ）製の勾玉と小玉、右下は関東・北陸以南の暖流域に生息するイモガイを忠実に模した石製品です。

縄文土器 縄文時代晩期前葉～中葉の亀ヶ岡式と呼ばれるデザインの土器です。小型の土器には彫刻に近い技法によって複雑で精緻な文様が付けられたものが多く、土器の形も多くの種類が作られます。



動物形土器と巻貝形土製品 左は動物をデザインした注口土器で弥生時代前期のもの、右は巻貝形の土製品で縄文時代後期後葉のものです。どちらも液体を注ぐ器として機能しうる形で、儀式など特別な用途に使ったと考えられます。



東北歴史博物館蔵

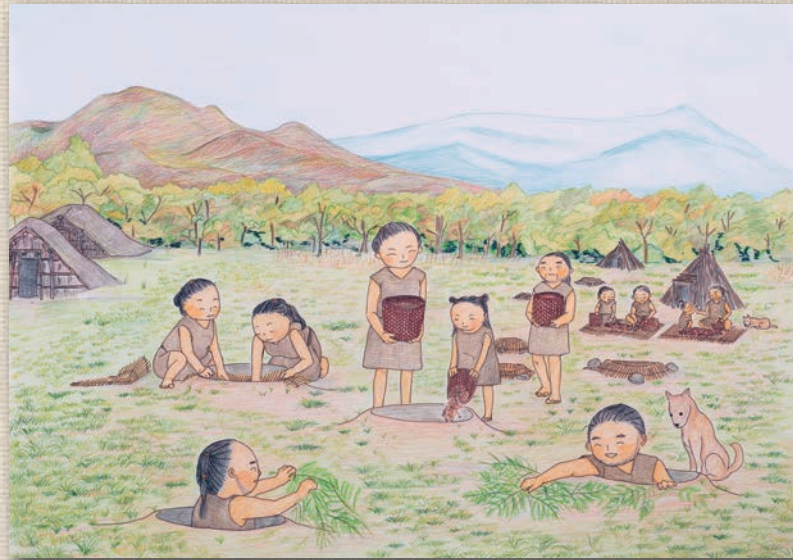
復元イラストで見る 縄文人の暮らし

— 韋堂山の縄文ムラにて —

森の恵み

実りの秋を迎えた韋堂山の縄文人は、森のドン
グリ集めに大忙し。ドングリなどの木の実はとても
栄養価が高く、保存もできる優秀な食料です。
ミズナラやクヌギ、クリやブナ、トチの実も集め
ます。木の実はリスやネズミたちにとっても大好
物ですから、動物たちと縄文人の競争です。

縄文ムラでは、貯蔵穴がたくさん掘られています。
人の背丈ほども掘り下げた深い穴の中にドン
グリを詰め込んで、木の板や粘土でしっかりとフ
タをします。厳しい冬や、狩りの獲物が少ない時
にムラの暮らしを支える大切な食料です。



竪穴住居の暮らし

縄文人の家は、地面を平らに掘り下げた床の上
に柱を立て、屋根をかけた竪穴住居です。家族が
集う真ん中には炉があり、たき火の火が燃えてい
ます。茶の間でこたつを囲む私たちの暮らしと変
わらない、家族団欒があります。

ムラのみんなで協力して集めたドングリを粉に
して作ったクッキーは、おいしさも栄養も満点。
大人も子どもも大好物です。炉のたき火にかけら
れた土器の中には、山菜や肉、魚などが美味しく
煮込まれています。今日も自然の恵みに感謝して、
みんなで「いただきます」。



土器づくり

土器は粘土でできています。良い土器をつくる
のに大切なことは、土選びです。ムラの一角で地
面を深く掘り、粘土の地層から良い粘土を集めま
す。掘ってきた粘土には黒土や砂をまぜて、よく
練ります。練れば練るほど良いのです。

粘土ができれば、いよいよ土器づくりです。細
長く伸ばした粘土の紐を積み上げて、器の形をつ
くります。粘土のつなぎ目をきれいに整えて、
器の形ができれば、表面に縄を転がしたり、棒の
先で模様を描いたり、渦巻きの飾りをつけて…。
素敵な土器ができました。



ムラのまつり

韋堂山のような大きなムラでは、季節ごとに「ま
つり」が開かれました。日頃からつながりの深い
まわりのいくつかのムラの仲間も集まって、自然
の恵みへの感謝と祈りをささげます。

縄文人の日々の暮らしに豊かさをもたらす自然
は、時には火山の噴火や洪水のような災害となっ
て彼らを脅かす不安定さもありました。自然に対
する不安な気持ちを、祈ることやまじないの儀式
によって乗り越えようとしたのです。不安で心が
落ち着かない時、何かに祈りたいという気持ちは、
縄文人も現代の私たちも同じなのです。

シカ狩り

縄文人の一番のごちそうは、なんと言っても動
物の肉です。シカやイノシシ、クマ、ノウサギな
どを狙います。狩りをして仕留めた動物は食料と
してだけでなく、毛皮は衣服や敷物に、骨や角は
さまざまな道具の良い材料になります。

ムラの中で狩りに長けた精鋭たちが山に入り、
力を合わせて獲物を追います。縄文人は狩猟犬と
してイヌも飼っていました。狩りは、動物たちと
縄文人の知恵比べです。縄文人は弓矢や槍を使っ
た狩りのほかに、動物の通り道や水場近くに落と
し穴などのワナを仕掛ける猟もしていました。



野焼き

出来あがった土器は、乾くと硬くなります。そ
のままでも使えそうですが、水に濡れると溶け出
して、もとの粘土に戻ってしまいます。苦労して
作った土器をお鍋やバケツのようにして便利に使
うには、水に濡れても溶けないように、野焼きで
じっくりと焼き上げます。

よく乾かした土器を、焚き火のそばに並べて
じっくり温めます。土器がよく温まったら、大き
くした焚き火の中で焼き上げます。焚き火の大き
な炎の中で、土器が鮮やかなオレンジ色に輝いた
ら、いよいよ完成です。



復元イラスト製作：古川史佳（2007年）

東北地方一帯に広がった豊かな落葉広葉樹林の恵みを糧として、韋堂山麓の縄文人は安定した生活を送っていたようです。彼らの樹木など植物資源を利用する技術は高度で、狩猟や漁労など動物資源を手に入れるための道具や技術も素晴らしいものでした。一方で、彼らは自然を畏れ敬っていたことも忘れてはなりません。祈りやまじないの道具として使われたであろう、日常生活では役立ちそうにない出土品がそれを伝えています。韋堂山麓に生きた縄文人は、この土地の自然に生かされた人々でもあったのです。

比べてみよう 縄文生活図鑑 —縄文人の道具箱—

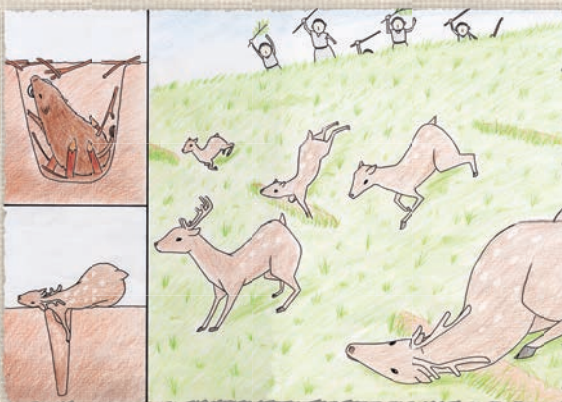
縄文人は身近な自然の材料を使って、さまざまな道具を作り出しました。多くの遺跡から出土するのは、中でも土や石などから作られていて、腐らずに残ったものだけです。それでも、出土品からは縄文人のモノづくりの高い技術を窺い知ることができます。彼らの道具箱をのぞいてみましょう。



石槍



弓矢や石槍を使った狩り



落とし穴を使った追い込み



石鏃（矢じり）

石槍や石鏃（矢じり）は狩りの道具で、どちらも先端を尖らせるように丁寧に作られています。特に石槍の大きなものは製作するのに高い技術が必要です。弓矢の矢の先に取り付けられる石鏃は二等辺三角形のものや下が挟んでいるもの、突起のあるものなどいくつかの形があり、赤や黄色など美しい色の石材も好んで使われています。

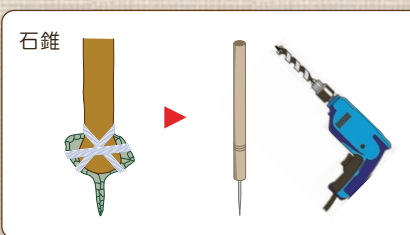


縄文人は弓矢や石槍で動物を狙うほか、落とし穴や罠を使った罠も盛んに行ないました。弓矢は飛び道具ですが飛距離は小さく、動物に気づかれずに出来るだけ至近距離まで近づけることが重要でした。矢じりにトリカブトなどの毒を塗ったとする説もあります。矢の刺さった動物が弱るまで追跡し、最後に石槍などで仕留めたのでしょう。

落とし穴は動物の通り道や水場の近くに掘られました。点々と列をなして掘られていることが多く、間に誘導柵などを設けた上で大勢で動物を追い立てる「追い込み罠」を行っていたと考えられています。細長い穴はシカなど、幅広の穴はイノシシなどを狙ったもののようです。町内では円田盆地の遺跡で多くの落とし穴が見つかっており、当時は多くの動物が集まる水辺が広がっていたようです。



落とし穴



石錐（ドリル）

先端を細く尖らせた石器で、穴を開けるのに使われた道具です。先端は細長く加工したものと、V字形のものとがあり、穴を開ける対象や目的によって使い分けたのでしょう。

動物の皮に穴を開け、紐で縫い合わせて衣服を作ったり、様々な道具作りでも活躍しました。ひびの入った土器に小さな穴を開けて、紐で補修することもありました。



打製石斧

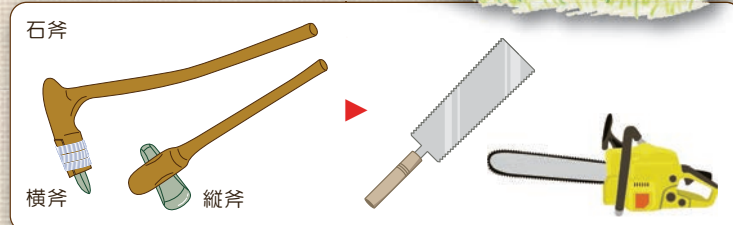
木を切り倒したり、加工するための道具で、伐採用の縦斧と加工用の横斧とがあります。また、硬い石材を打ち欠いて作られた打製石斧は切れ味は良いが刃が欠けやすく、衝撃に強い石材を磨いて仕上げられた磨製石斧は丈夫で刃こぼれしにくいという特性があります。

磨製石斧の性能は鉄の斧の4分の1ほどで、直径が15cmくらいの木だと、10分ほどで切り倒せたようです。



磨製石斧

縦斧を使った伐採



石篋



搔器

解体した動物の皮から腐敗の原因となる皮下脂肪などを取り除き、柔らかく加工する「皮なめし」に使った石器です。加工した革は、衣服や敷物、袋などに使われたのでしょうか。東北地方など寒冷地に特有の石器で、防寒性のある衣服などの材料として、毛皮や革の需要が高かったことが窺われます。

両面を加工してある石篋と、表面だけを加工して裏面を平らなままにした搔器とがあり、作業の工程で使い分けていたと考えられます。皮を傷つけないように、刃先の部分は丁寧に加工されて丸く整えられています。脂が付着して切れ味が鈍ると、少しずつ打ち欠いて刃を付け直しながら使いました。



石篋を使った皮なめし



石匙（つまみ付きナイフ）



狩りで仕留めた動物の解体などでナイフとして使われた石器です。つまみの部分につけた紐の輪に指を絡めて持つことで、滑りやすい場面でも安定して力を入れることができます。腰からぶら下げて持ち歩くことも出来たので、携帯用の万能ナイフとして物を切ったり削ったりする様々な用途に使われたようです。

刃の部分が欠けたり磨り減ったりすると、少しずつ打ち欠いて刃を付け直しながら使いました。長く使われたものは、刃の部分が寸詰まりになっていたり、痩せ細っていたりします。個人が身に着けて使ったもので、お気に入りの大事な道具だったのでしょう。



石匙を使った食材の切り分け



磨石

石皿

凹石

河原にある丸い石や平べったい石も、縄文人の道具になりました。一見すると普通の石ころのようですが、よく見ると部分的にくぼんでいたり、磨り減っていたりするので道具として使われたことが分かります。

凹石と敲石を使って堅い木の実の殻を割り、石皿と磨石で木の実などを磨り潰して粉にしたと考えられています。木の実の粉は水と混ぜて練り、クッキーや団子、粥のようにして食べたのでしょう。

木の実を食料とした縄文人にとって、こうした石の道具は無くてはならないものでした。このように重量物の石器や大きな土器など、様々な生活用具が増えたことも、縄文人が定住生活を始めた理由の一つなのでしょう。

石皿と磨石を使った製粉



浅鉢

深鉢

縄文時代には様々な形の土器が作られましたが、最も多く作られたのは、バケツのような形をした「深鉢」と、サラダボウルのような形をした「浅鉢」の二種類です。時期が進むと「壺」や「皿」の形をした土器も作られました。

深鉢には、表面におこげや煤が付いたものが見られるので、鍋として火にかけて煮炊きに使われたことが分かります。他にも水瓶や食料の保存容器など、様々な使い方があったことでしょう。

縄文土器には、手の込んだ様々な装飾が施されています。縄文人が日常生活に欠くことのできない土器を、とても重要な道具と考えていたことの現れです。美しい文様には、どんな意味が込められたのでしょうか。



土器を補修した痕跡

発掘された土器の破片を観察すると、時折小さな穴の開けられたものが見つかります。これは、ヒビの入った土器が壊れないように、紐を通してつなぎ止め、補修するために開けられた穴です。



土器の底に残る敷物の痕跡

土器の底には、敷物の痕跡が残っていることがあります。細く幅をそろえた樹皮などを組んだカゴやゴザのようなもの、細くした植物の繊維を編んだ布もありました。

のぞいてみよう 縄文の精神世界 —縄文人の宝箱—



土笛を吹く
(復元品による再現)

縄文時代の楽器の出土例は少なく、完全な形で発見され実際に音を鳴らすことができる土笛として全国的にも珍しい出土品です。

高さ6cm、直径4.5cmの中空で底面のある釣鐘形をしており、上部に直径1.5cmの息を吹きかける「歌口」の穴が1か所あけられています。ちょっとコツが要りますが、うまく穴に息を吹きかけると「ポー」という素朴な音が鳴り響き、息のあたる角度を変えることで音の高さや音色を変化させることができます。ピンの口に息を吹きかけて音を鳴らして遊ぶのと同じ原理です。

縄文人がこの土笛をどんな時に使ったのかは分かっていませんが、この土笛をとおして、はるか昔の縄文人が奏でていたのと同じ音色を聴くことができるのだと思うと、なんだか縄文人が今までよりも少し身近に感じられるような気がしませんか？



土笛

湯坂山B遺跡（縄文時代中期後葉）



ヒスイのペンダント

谷地遺跡（縄文時代中期前葉）

透き通るエメラルドグリーンが美しいヒスイで作られた垂飾り（ペンダントトップ）です。ヒスイ（硬玉）の産地は日本国内でも新潟県や富山県などに限られており、このように透明度が高く良質なものは新潟県糸魚川産と推定されています。また、ヒスイの原石はとても硬く、このように美しい形に磨き上げ、穴を開けるまでには大変な時間と労力を費やしたことでしょう。

厳しい自然環境の中で狩猟採集の生活を送った縄文人ですが、一方でこのように“飯のタネにはならない”ような作業にも多くのコストをかけたことが分かります。このペンダントを身に着けたのは、ムラのリーダーか、それとも祈りを捧げるシャーマンのような人物でしょうか。

現代の私たちから見ても高い芸術性を感じさせる装飾品は、彼らの暮らしと文化の豊かさを教えてくれています。

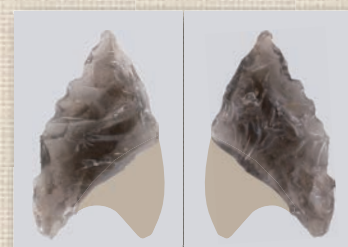


立像土偶

谷地遺跡（縄文時代中期前葉）

立てて置くことができるタイプの土偶です。全身が美しい曲線の組み合わせで表現されており、高いデザイン性を感じさせます。頭部が失われていますが、長身で腹部とお尻に膨らみがあり、乳房が強調されているところから妊娠した女性を象ったものと考えられます。

縄文時代に作られた土偶のほとんどはこのように妊婦を象っており、子孫の繁栄や豊かな実りを願う意味が込められたものと考えられています。自分たちの「こころ」を目に見える形に表現した彼らの精神性や高い芸術性が、こうした造形品の中に凝縮されています。



黒曜石の矢じり

西浦B遺跡（縄文時代後期前葉）

透き通る良質な黒曜石で作られた長さ2cmほどの矢じりです。黒曜石の産地は全国各地にあり、蔵王町周辺にもいくつかの産地が知られていますが、このように不純物の少ない良質な黒曜石はあまり多くありません。いくつかの産地の良質な黒曜石は、ブランド品として運ばれ、遠く離れた遺跡から出土することがあります。

この矢じりに使われている黒曜石の成分を分析したところ、新潟県新発田市の板山産と判明しました。板山産の黒曜石は谷地遺跡でも確認されていて、蔵王山麓の縄文人が各地の良質な石材の情報をもち、遠くのムラとの交流によって手に入れていたことが分かります。

高速道路も新幹線もない時代、はるか昔の縄文人たちが遠くのムラともつながりを持ち、モノやヒト、情報の交流が盛んに行なわれていたことを、1点の矢じりが教えてくれています。